2026 年３月 15 日（大斎節第４主日、Ａ年）
メッセージ
「目が開かれる」
（ヨハネによる福音書９：１-38）

司祭ヨセフ太田信三

福音とは、大逆転だ、と言われることがあります。先週の福音では、イエスとの出会いによって、サマリアの女性の渇きが癒され、彼女の負の烙印が神の栄光を表すしるしへと変えられました。大逆転です。今週の福音でもまた、負の烙印を押された一人の人間が、イエスとの出会いによって、神の栄光を表すことになります。

通りがかりに彼を目撃した弟子たちの、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか」という言葉にあるように、当時、目が見えないということは、家族や本人の「罪」によるものだとされていました。しかし、イエスはそれをきっぱりと否定し、それは神の栄光が彼に現れるためだと宣言します。そして実際に、彼を通して神の栄光が現されるのです。「あいつは罪人だ」とされていた人間が、神の栄光を現すものとされる。まさに、大逆転です。

けれども、目が開かれた彼は、結果的に共同体から追放されてしまいます。それが一体なぜ、大逆転なのでしょうか。彼はそれまで、神からも人からも見放された命を生きていました。しかし、追放された地でイエスをその目で見、信仰を告白した彼は、神とともにある命、神に愛された命へと変えられたのです。いや、そうではない。はじめから彼のことを神は愛していたのです。つまり実際には、彼は人から「神の名の下に」否定され続けてきたのです。イエスがその彼の目を開かれた、というのは、それは「誰が何と言おうと、あなたのことを神は愛している！」という宣言とともに、神の愛が彼に満ち溢れた、ということなのです。「神がわたしを愛しておられた！」彼はなんと嬉しかったことでしょうか。これぞ大逆転です。彼は共同体を追放されようとも、神がいない世界から、神の愛に満ち満ちた世界に生きるものとされたのです。

ファリサイ派の人々は目が開かれた男に対し、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言いました。彼らは弟子たちと同じように、単純な因果律的に「目が見えない」ということを解釈してしまっていました。それどころか、詰問を受けるたびにイエスに真実に近づいていった「目が開かれた男」とは対象的に、彼らは詰問を繰り返すことで、より頑なになっていきました。彼らは律法を良く学んでいました。しかしその学びは、律法に込められた神の心を知る、というよりも、人を裁く道具として学んでいたのです。彼らにとって、神とは律法によって裁く神でした。彼らはその神によって、目が開かれた男を裁いたのです。ここに「見える」と言ってしまう彼らの恐ろしさがあります。「見える」という言葉は言い換えれば、「私は神が分かっている」ということであり、それはもはや自分が神に成り代わる奢りに他なりません。そうなるともはや、目が開かれた男が目の前にいても、それを認めることができません。なぜなら、それを認めてしまっては、自分が「分かっていない」ことを認めることになるからです。しかし、それに薄々気がついているのでしょう、自らを壊される恐ろしさから必死に自分を守るように、彼らは詰問するたびに頑なになっていくのです。

こうして、見えなかった男が見えるようになり、見えると言っていた人間が見えない、という全くの逆転が起こりました。神に愛されていない命などありません。神はあなたを愛している！というイエスの招きの声に応える時、私たちは「負の烙印」を押し合う不信感のなかで生きることから解放され、まことに神の栄光の中を生きる命が与えられるのです。